ラグビーとサッカーの客席にある本質的な違い

サポーター同士が肩を組み合う文化

廣瀬 俊朗（ひろせ・としあき）
元ラグビー日本代表キャプテン

負けた選手が笑顔で「おめでとう」と握手した

ラグビー日本代表が、第8回ワールドカップの初戦で、これまで二度の優勝を誇る南アフリカ代表スプリングボクスから34―32と劇的な逆転勝利を収めた。そうした大きな感動と喜びのなかで、試合直後にピッチ上に現れた光景を見て、僕は改めてラグビーという競技の素晴らしさ、価値を再認識した。負けた南アフリカの選手たちが、悔しさを押し殺して、笑顔で日本の選手たちに手を差し出し、握手をして「おめでとう」と言っているのだ。僕も、グラウンドのみんなに駆け寄ったとき、南アフリカの選手たちと握手をすることができた。

彼らにしてみれば、ここで日本に負けることなどまったく考えていなかっただろうし、ものすごく悔しかったはずだ。それでも、自分たちで集まって敗因を分析したり反省したりする前に、まず勝った日本代表を敬ってくれた。

日本の選手たちは、長い強化の末に手に入れた大金星だったので、とにかく勝利を喜ぼうという気持ちでいっぱいだったが、そういう状況でも、南アフリカの選手たちは僕たちをリスペクトすることを忘れていなかった。それが何よりも嬉しかった。同時に、その光景は、南アフリカというラグビー伝統国を代表する選手たちの懐の深さを僕に改めて認識させてくれた。

僕は、彼らが築いてきたもの、背負っているものの大きさをその場で感じ取って、僕たちはまだたった1回勝っただけなんだ、と考え直した。

南アフリカ代表のなかには、当時サントリーサンゴリアスでプレーしていたスカルク・バーガー選手やフーリー・デュプレア選手がいた。彼らはチームメイトの小野晃征選手をはじめ、ジャパンラグビートップリーグでいつも対戦する日本代表の選手たちをよく知っていた。僕も、彼らをよく知っていた。だから、彼らの顔を見た瞬間に、大きな喜びの渦中にいながら、ふと素に戻って、そういうことを考えられたのかもしれない。

本当にラグビーは素晴らしい、こんな素晴らしいスポーツはなかなかない――僕は、そんな感慨にふけっていた。

ラグビーをよく知らない記者に対してもイロハを教えてくれる

新田日明 （スポーツライター）

今大会で日本のラグビー界は諸手を挙げながらファン、そしてメディアの〝にわか層〟を大歓迎し、率先して新規開拓に務めた。選手やチームスタッフ、大会関係者は非常に協力的で、それこそラグビーをよく知らない記者に対してもイロハを教えてくれるぐらいの謙虚な姿勢で接している取材対象者も多くいると聞く。

米国代表を率いたギャリー・ゴールド・ヘッドコーチ(HC)に以前、こちらの陳腐な質問にも面倒臭そうにせず、とても紳士的で丁寧な振る舞いを見せながら取材に応対してもらい、感動したことがあった。その思いをすぐ本人にぶつけてみると、こんな答えが返ってきたのを覚えている。

「別に驚くことではない。私だけじゃなく多くのラガーマンは皆、同じ振る舞いを見せると思う。私が常に憤っていたとしたらラグビーに携わる資格はない。ラグビーは相手との戦いだが、憎しみ合う戦争じゃない。お互いがリスペクトし合うからこそ成り立つスポーツだ。時にエキサイトしてしまうことも確かにあるが、試合が終わればノーサイド。シェイクハンドだ。チームメートもすべて同じ思いを共有している。品位、情熱、結束、規律、尊敬――。

これらをラグビーに携わる誰もが持ち合わせていると信じている。その精神を享受してほしいからこそ、私はラグビーの素晴らしさをたくさんの人に伝えたい。きっと日本のラガーマン、ラグビー関係者たちも、これは共通の考えだろうね」